



一眼レフ
デジカメ



川崎ゆきお

「いろいろと思うことがあるのですが、忙しくて思っている暇がありませんねえ」

「多忙でなにより」

「用事をこなしながら、考えてはいるのですが、じっくりと考えたり思ったりすることがないですねえ」

「目先のことばかり、という感じですか」

「いやいや、数手先まで考えていますよ。そうでないと、一つのことで手間取ると、押してきますからねえ。遅れが出ます」

「僕なんか、デジカメを買うだけで、家電店の周りの喫茶店を何軒も梯子しますよ。どれがいいのか、どれが本当に買うべきものなのか、買っても使いきれのらうかとか」

「何軒ですか」

「ああ、喫茶店で一人ミーティングする店の数ですか。それは物にもよりますよ。決まるまでです。一応決まったので、出るのですがね。店員を呼ぶ前に、駄目 なんです。詰めが甘いことに気付いた。物は良くても駄目なんです。本当に欲しいのか、本当にこれ買ってと自問します。それで、決められず、また喫茶店で一人御前会議です」

「暇なんですか」

「はい、その日は、まあ、他に予定はないし、帰ってから寝るだけですがね。しかし、明るいうちに帰り、充電して、明るいところで写してみたい」

「ああ、デジカメって、充電しないと使えないのですなあ」

「乾電池式もありますよ。少ないですがね。それなら、その場で写せます」

「ほう」

「だから、その日は、家を出る前から、何が良いのか、ずっと考え続けていますよ」

「そういえば私もデジカメを持っていますが、使ってませんねえ。使う機会があると思い、買ったのですがね。写している暇もないですよ」

「何を買われました」

「覚えていませんが、でかいやつです」

「レンズ交換が出来るタイプですね」

「さあどうだったか」

「値段は」

結構な値段だった。

「じゃ、一眼レフですよ」

「そうなんだ。あまり考えないで、進められるまま、買いましたよ」

「写す機会がないのは、重くて持ち出しにくいからですよ」

「いや、それ以前に写す機会がないのですよ。でも、一応持っていますからね。写そうと思えばいつでも写しに行けますよ」

「旅行とかには」

「ああ、持って行きませせん」

「重いからでしょ」

「ケータイがあるので、それで不便しないし」

「ケータイで写します？」

「え？」

「だから、ケータイに付いてるカメラで写します？」

「写しません」

「どうして」

「写すような物がないのでね」

「ああ、そうですか」

「しかし、あなたのように、そんなどうでもいいようなことを真剣に聞いたり、考えたり出来る
ことが羨ましいです」

といいながらも、こういう会話そのものが無駄な時間なのだが、いくら忙しくても、歩きながらなら話せる。

「私は地下鉄です」

「僕は私鉄の方です」

「じゃ、ここで」

「あのう」

「何ですか」

「その使っていない一眼レフデジカメなんですがね」

「いいですよ。安くお譲りしますよ」

「じゃ、連絡します」

「はい」

それを買い取る道筋をつけたこの男は、非常に大きな仕事をしたことになる。

了